第9回

書かれた「この地」を読む

みのかもブックマーク

▲逍遙故家附近：野田宇太郎撮影（写真提供：野田宇太郎文学資料館）

野田 宇太郎（のだ うたろう）
（1909-1984）

福岡県に生まれる。久留米で詩作を始め、東京に移住後、編集者として活躍。1951年「日本読書新聞」に「新東京文學（がく）散歩」を連載。1962年博物館明治村の設立に携わる。1977年紫綬褒章受章。

野田宇太郎の「文学散歩」を読む（1）

戦後、日本各地の文学に縁の深い地を訪ね歩き、紀行文を執筆した野田宇太郎は、「文学散歩」の創始者です。野田が1962～1963年に東海地方の山野部を踏査した記録は『文学散歩 第13巻 東海文学散歩 山道篇（文一総合出版：1978年）』で読むことができ、中山道をたどりながら太田を訪れた時の文章が収録されています。

その太田に先ずわたくしの心をひきつけたのは、いうまでもなく太田代官所主席手代の子として生れた逍遙坪内雄蔵（しょうようつぼうちゆうぞう）の少年時代の姿であった。

近代文学史研究家の野田にとって、坪内逍遙は大きな存在でした。野田は幼少期の逍遙にまつわる逸話を織り交ぜながら、風景の中に逍遙の面影を手繰り寄せるように書き進めます。本陣・脇本陣から川べりに曲がる道を歩き、代官所の跡地である太田小学校に着き、「逍遙顕彰碑」の碑文を読んで、虚空蔵堂から河原に出ます。逍遙が詠んだ「山椿（つばき）の歌」の石碑がある祐泉寺に向かった野田は、木曽川の岸には椿が多いと気付きます。歌碑を読み、**「山椿の一重の花はとくに美しい日本の自然の贈り物である。勇藏も幼心に椿の花の紅色（べにいろ）をいつも滲（にじ）みこませていたに違いない。」**と思いを巡らせました。

▲祐泉寺 逍遙歌碑：野田宇太郎撮影
（写真提供：野田宇太郎文学資料館）

問みのかも文化の森
☎28-1110